

2022 年 8 月 21 日（日）「肉の行いからの自由」

ガラテヤ 5:19-21

19 肉の行いは明白です。淫行、汚れ、放蕩、20 偶像礼拝、魔術、敵意、争い、嫉妬、怒り、利己心、分裂、分派、21 妬み、泥酔、馬鹿騒ぎ、その他このたぐいのものです。以前も言ったように、ここでも前もって言いますが、このようなことを行う者は、神の国を受け継ぐことはありません。

【序論】

5 章も終わりに差し掛かっていますが、当初は 16～26 節をひとまとめに学ぶことも考えておりました。ですが、熟慮した結果、3 回に分けて扱うことにいたしました。

- ① 16～18 節：肉の克服（二つのアプローチ：律法による／御霊による）
- ② 19～21 節：肉の本質（神の支配から離れた行い）
- ③ 22～26 節：御霊の実（神の支配の下で結ぶ行い）

今日は②の部分となりますが、私は長年聖書を読んでくるなかで、特に 21 節で言われていることを「怖い」と感じてきました。「このようなことを行う者は、神の国を受け継ぐことはありません」と言われているのです。これはキリスト者に対して言われていることであって、何らかの罪を犯すと救いが取り去られてしまうように聞こえてくる。私たちは心に「汚れ」を負うこともあれば、「怒り」に捕われることもあり、誰かを「妬む」こともあるでしょう。ここに列挙されている悪徳が自分と無関係だと言い切れる人はいないのではないのでしょうか。この箇所をどう理解すべきであるか、長年悩んでまいりました。

【本論】

前回は「肉の克服」をテーマに語らせていただきましたが、「肉」とは「人の悪しき性質」「一貫して自己を主張し、自分の利益と欲望の充足を求める生き様」などと説明されるものです。この「肉」の内容が具体化される。私はこれらを「神の支配から離れた行い」と言い換えてみました。ここには 15 の悪徳が並べられていますが、「肉の行い」というのはもちろんここに挙げられているものだけではありません。類似する多くの箇所がありますが、共通する内容もあれば、それ以外のものもあります。パウロはガラテヤ教会の現状を鑑みて、思いのままにここに列挙したのでしょう。

これら 15 の罪は 4 種に分類することができますと言われます。

- ① 性の錯乱
- ② 宗教的混乱
- ③ 愛の破壊
- ④ 自制心の欠如

以上の内容に沿って見てまいりましょう。

本論 1. 性の錯乱

まず「淫行、汚れ、放蕩」(5:19b) について。性的な罪が筆頭に挙げられるのは、これが最も顕著に神と人との関係を破壊するからでしょう。一つずつ用語の意味を確認しておきます。

「淫行」(μοιχεία／モイケイア) …既婚者との性交、あらゆる婚外交渉

「汚れ」(πορνεία／ポルネイア) …同性愛、近親相姦、獣姦…等

「放蕩」(ἀκαθαρσία ἀσέλγεια／アカサルシア・アセルゲイア) …情欲に身を任せた生活

これらの言葉が取り上げられるのは、ガラテヤの信徒たちの中に何らかのこのような罪に耽っていた者がいたからではないか。異教社会特有の性的錯乱がガラテヤの地に根づいており、信徒たちも以前からの悪習慣から抜け出すことができなかったのだと思われます。ユダヤ人は性的清さを倫理的生活の基盤としていましたので、この点では一線を画すところがあった。21 節で「以前も言ったように」と言われていることから、パウロは第二回目のガラテヤ訪問の際に、性的罪を捨てるよう指導したのでしょう (使徒 18:23)。

現代日本のキリスト教会の中で、そのような罪が横行していないことを願います。このような問題は隠れたところで行なわれますが、それは罪を犯している人自身の霊的生活を破壊し、共同体の霊性にも打撃を与えます。明るみに出てきたとき、教会はそれを放置するわけにはいかず、群全体が苦しむことになる。罪をうやむやにすると、教会は汚れを持ったまま進んでいくことになります。

本論 2. 宗教的混乱

次に「偶像礼拝、魔術」(5:20) について。元々異教の神々を拝んでいたガラテヤの町の人々は、キリスト教信仰に導かれてからも元の生活に舞い戻っていく傾向があったのでしょう。ガラテヤの町の宗教事情について、以前 4:8-11 からの説教の中で次のように説明させていただきました。

「ガラテヤという町は、紀元前 64 年にポンペイウスによって征服されてローマの属州になりました。ローマ帝国は隣国を次々と征服し勢力を拡大させていきましたが、宗教や言語に関しては比較的寛容で、属州の宗教事情にはあまり干渉しなかったといえます。よって、庶民は思い思いに宗教を選択し、幅広い多神教社会が形成されていたことが容易に想像できるでしょう。ガラテヤ教会の信徒たちも、元々はそのような価値観の下で生きていましたので、ギリシャの神々から占星術まで、あらゆるものを受け入れていたと思われます。」

念のため、言葉の意味を見ておきましょう。

「偶像礼拝」(εἰδωλολατρεία／エイドーロラトゥレイア) …偽の神々を礼拝すること

「魔術」(φαρμακεία／ファルマケイア) …薬液や薬物を調合した魔法

十戒の第一・第二戒では、偶像礼拝が固く禁じられています。また、魔術は主の最も忌み嫌われることでした。初代教会の時代、魔術は異邦人世界に横行していたことが使徒言行録を読むと分かります (8:9-11、13:8-10、19:13-19)。

日本のキリスト者も知らずして星座占いの虜となっていたり、遊び感覚で危険な道に踏み込んでいることがあります。タロットゲーム、こっくりさん、へびメタなど、身近なところに悪霊の強い影響が及んでいるものがあります。これらへの興味関心は非常に危険であり、闇の支配に心を捕えられているかもしれません。

本論 3. 愛の破壊

次に「敵意、争い、嫉妬、怒り、利己心、分裂、分派、妬み」(5:20b-21a) について。教会内での交わりが破壊される要因が次々と挙げられています。教会には、牧師、信徒、求道者の間の交わりがたくさんあります。しかし、それらは注意深い配慮がなくては、無残な形で崩れてしまうかもしれません。個々の単語の意味を、別の訳の可能性も探りつつ解説いたします。

「敵意」(ἐχθρα／エクストラ) …憎しみ、憎悪

「争い」(ἐρις／エリス) …主張、口論、反目

「嫉妬」(ζῆλος／ゼーロス) …熱情、熱意

「怒り」(θυμός／スュモス) …情熱、熱、瞬間的に燃え上がってはまた鎮まる怒り

「利己心」(ἐριθεία／エリセイア) …自己中心性を前面に押し出したがる願望

「分裂」(διχοστασία／ディコスタシア) …意見の不一致、不和

「分派」(αἵρεσις／ハイレシス) …派閥

「妬み」(φθόνος／フソノス) …妬み

この中で、「嫉妬」と「妬み」は日本語でほとんど同じですが、原語を調べてみると少しニュアンスの違いがあることが分かります。「嫉妬」とは元々「熱心」に近い意味で、神に対する熱心がかえって隣人を傷つける結果をもたらす可能性があることを示しているでしょう。これはパウロ自身が辿った道でしたが、ユダヤ人たちも使徒たちの力ある業に嫉妬して攻撃しました。また、「敵意」という言葉から思い出すのは、ガラテヤの信徒たちがまるでパウロの敵になったかのような振る舞いをしていたという記事です(4:16)。更に、「分裂」「分派」というのは、パウロに着くかユダヤ主義者に着くかというところで、教会の心が分かれてしまっていたことを表しているでしょう。

現代の教会においても、分裂の問題はそこかしこで聞かれます。その原因を探っていくと、これらのどれかが当てはまってくるかもしれません。

本論4. 自制心の欠如

最後に「泥酔、馬鹿騒ぎ」(5:21b)について。新改訳では「酩酊、遊興」と訳されているところです。当時、異教の祭に伴うどんちゃん騒ぎがあったようで、酒神バックスを讃える行列が皆酔っ払って騒いでいた様子が窺えます。そのようなことが教会内で起きていたのでしょうか。酒は理性を放棄させ、肉欲を噴出させる危険性を持ちます。呑むところから罪に発展するケースが多い。

「泥酔」(μέθη／メーセー) …酩酊、酔った状態

「馬鹿騒ぎ」(κῶμος／コーモス) …どんちゃん騒ぎ、酒宴

コリント教会では、聖餐式で飲むぶどう酒によって酔っ払う人がいたようです。人は飲食によって罪を犯す危険性があります。人につまづきを与える姿は慎まなければならないでしょう。

【展開】

以上、一つひとつの言葉を調べてまいりましたが、「その他このたぐいのもの」と言われているように、これらはあくまでも「例」であって、肉の行いというのは幅広く存在するということが付け加えられています。その先は自分で考えなくてはなりません。

「肉の行い」についてのパウロの警告は生やさしいものではありません。「このようなことを行う者は、神の国を受け継ぐことはありません」と言われている。もし文字通りに読むならば、ガラテヤの信徒たちが前述の罪に耽っていたとしたら、もはや彼らは神の国から除外された存在であると言われていることになってしまいます。しかし、パウロはもちろんそ

のように言っているのではありません。今もし罪の内を歩んでいるなら、その道から直ちに離れるよう伝えているのです。さもないと、その人はどんどん罪の泥沼に沈んでいき、ついには神の光がまったく見えなくなってしまうからです。そうなる前に目を醒さなくてはなりません。救いが取り去られると言われているのではない。しかし、そもそも救われていなかったかのような人生を歩み続けなくてはならなくなるかもしれません。

神から生まれた人は皆、罪を犯しません。神の種がこの人の内にとどまっているからです。

この人は神から生まれたので、罪を犯すことができません。(Iヨハネ 3:9)

ここで使われている動詞は未完了形であり、「罪を犯し続けることはない」というニュアンスで理解することができるでしょう。キリスト者は罪から自由にされていますので、聖霊の助けによって罪から離れることができるのです。今回は、私たちが見るべきもの、この人格に宿すべき「御霊の実」について学びます。

【結論】

ガラテヤ書は一貫して「キリスト者の自由」を伝えています。私たちは罪の支配から自由にされた存在なのです。神の国を相続する者は、神が喜ばれる道を選択します。自力で「こうしなくては」とがんばっても、肉欲に勝つことはできないでしょう。御霊の満たし、御霊の助けを祈り求める必要があるのです。そして、自分が神の支配下に置き直された存在であることを、どんなときにも確認／確信して歩み続けたいと思います。

【祈り】

私たちを罪より贖ってくださった天の父なる神様。このような私たちを「聖なる者」と呼んでくださることを感謝いたします。その名にふさわしく歩めるようになることを願います。私たちにしつこくまとわりついてくる悪しき習慣より離れさせてください。古い生き方を捨て、光の子として歩むことができるよう導いてください。私たちが見るべきところを、内なる御霊の働きへと、決定的に変えさせてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
律法により、ご自身の聖なる御心を現し給うた、父なる神の愛、
人に罪の赦しを得させ、神の聖徒と呼び給う、主イエス・キリストの恵み、
古き悪しき習慣より離れさせ、神の喜ぶ道を選ばせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。